

人生の転換期における心理 (II)

筑波大学心理学系
落合 幸子

問 題

哲学においては、自我と時間とのかかわりは大きなテーマとなっている。アリストテレスも、「魂が存在しない限り時間の存在は不可能である」とのべている。つまり、自我がある限り時間は意識され、生き方が時間を決定するし、時間が生き方を規定していく。

落合 (1980) は、人の生き方の転機は時間すなわち年齢に影響されると考え、時間と生き方とのかかわりを明らかにしようとした。

その結果、年齢に対する意識は、1) どの年齢も同様に意識されるのではなく、各年代とも異なって受けとられる、2) 四捨五入意識があり、同一年代でも前半と後半とでは心理的に意味が異なる。すなわち前半は比較的安定している。それに対し後半は自分の停滞を意識しあせりの中で鬱々と過ごす時期である。しかし半面後半は何らかの行動を起こそうという動機の高まっている時期である。3) この傾向は次の年代になる直前の1, 2年に特に強い、ということが明らかにされた。

この研究では、各年齢で感じたことを自由記述させたが、今回は、質問紙によって転換期の心理を明らかにしようとした。転換期の心理は、次の5点から検討された。

(1) 生活感情

前の研究で年齢と精神状態との間に関係があることが示唆された。この点をより明確にするために、斉藤 (1966) の生活感情尺度をもちいて情緒面を測定した。

この尺度は、連帯—孤独、安定—不安定、充実—空虚の三次元から構成されている。

(2) 将来の展望の明暗

小宮山 (1973) は、生活感情を将来の展望の明暗との関係で調べ、幸福感を感じているものの未来は明るくて、倦怠感、劣等感を感じている者の未来は暗いことを示した。

人は未来が明るく開かれていると感じた時、生きがいを感じ、連帯感、安定感、充実感を感じるであろう。しかし逆に未来が閉ざされ暗く感じられる時、人間の精神は閉ざされ後向きとなり、自己の現在の中に閉じこもり

自閉的な生活を余儀なくされるであろう。そこで、未来の展望の明暗を年齢との関係で検討しようとした。

(3) 実存的責任意識

人生観に対するアプローチには様々なものがある。山下 (1965) の責任意識の調査もその1つである。彼は、対人的責任意識に対するものとして、自分の人生をひきうける責任ともいうべき実存的責任意識の概念を提出している。

また Rotter (1966) により確立された Internal-External Locus of Control の概念も類似の概念である。これは次のように定義されている。

Internal Control —強化が自分自身の行動の結果、つまり自分の能力、努力、技能の結果によってコントロールされていると認知する考え方

External Control —強化が自分自身の行動の結果よりも、むしろ運、チャンス、力のある個人というような外的要因によってコントロールされていると認知する考え方

池田 (1979) は、これらの考え方を参考にして、人生への姿勢を測定するものとして、実存的責任意識調査を作成した。積極的に自分の人生をきり開き、その責任を自分自身にあるとするか、あるいは自分の人生を消極的にとらえ自分以外のもの手にゆだねるかを調べている。

この2つのタイプの人生への姿勢と年齢との間に関係があると思われるのでその点を検討する。

(4) 時間に対する志向性

Wohlford (1966) は、感情の状態と時間的展望との関係について、次のような結果を得ている。人が幸福であり positive な状態の時には、もっと別の快・成功を考え、より多くの満足を得ようとして未来に思考が拡がっていく。一方不幸な時期や negative な感情状態では、いやなことが起こるのを恐れ過去への係わりが大きくなっていくというものである。

Butter (1963) も、問題が起きたり危機に陥った時に人は過去をふり返ると述べている。

人生の転機の年齢にさしかかった時、人は過去を振り向くのか、未来にまなざしを向けるのであろうか。年齢

と現在、過去、未来への志向性との係わりを検討する。

(5) 時間的展望の長さ

Lewin (1949) は、時間的展望の拡大は発達を通じて起こるとした。彼によれば、幼児は現在の時間のみ存在しており、未来への期待をもっていない。それが成長するにつれて、未来の可能性に対する認知が増大するという。はたして、年齢とともに時間的展望の長さが拡大するのであろうか。この点についても検討を加えよう。

方 法

(1) 調査Ⅰ—生活感情調査

斉藤 (1966) の「生活感情尺度」の調査を使った。

「生活感情尺度」は30対の形容詞からなり、連帯—孤

表1 生活感情尺度の項目
斉藤 (1966) より

次元	No.	尺 度
連帯 孤独	1	にぎやかな—さみしい
	2	まとまった—バラバラな
	3	協力的な—対立的な
	4	うちとけた—(心の)へだてのある
	5	開放的な—閉鎖的な
	6	仲間の多い—一人ぼちな
	7	指導力のある—依存的な
	8	集団的な—個人的な
	9	頼りになる—頼れない
	10	愛情豊かな—冷たい
安定 不安定	11	安定した—不安定な
	12	おちついた—おちつかない
	13	おだやかな—激しい
	14	健康的な—病的な
	15	力あふれた—無(気)力な
	16	静かな—そらぞしい
	17	しっかりした—弱々しい
	18	信じやすい—疑い深い
	19	調和のとれた—不調和な
	20	楽観的な—悲観的な
充実 空虚	21	明るい—暗い
	22	楽しい—苦しい
	23	喜ばしい—悲しい
	24	充実した—空しい
	25	あたたかな—寒々とした
	26	前向きな—後向きな
	27	望みのある—望みのない
	28	満ちたりた—不満足な
	29	成長してゆく—挫折しそうな
	30	若々しい—年寄りじみた

独、安定—不安定、充実—空虚の三次元の下位尺度より構成されている。その30項目の内容と、その属する次元は表1に示すとおりである。

この調査に対する回答カテゴリーとしては、「非常に」「かなり」「どちらかといえば」を各形容詞対の両方に配し、中心に「どちらともいえない」を配した。各項目について以上の7段階に評定させた。配点は、positive 方向から negative 方向に7点から1点を与えた。なお、表1において左側にあるのが positive とみなした方向である。実際の調査においては偶数番号の項目は右側に positive にしてある。

(2) 調査Ⅱ—将来の展望の明暗

調査Ⅱは、時間的展望の内でも特に将来の展望の明暗を調べる目的の調査である。池田 (1979) によって作成された項目のうち、あなたは卒業後の進路が希望通りいくと思いますか、「あなたは結婚とその後の生活に対して希望をもっていますか」、「あなたは人生の危機に陥った時、そこから立ち直れると思いますか」の3項目をぬいた7項目である。表2に具体的な項目を示す。各項目に対して、この表に示すような5段階の答のうち、最も自分にあてはまると思われるものを選んでもらった。

教示は、「あなた自身の将来に対して、どのように感じますか、あてはまる所に○をつけてください」とした。

回答に対しては、(1)が1点、(2)が2点、(3)が3点、(4)が4点、(5)が5点とした。

表2 将来の展望の明暗を測定する項目

1. あなたの将来は一般的に見て、明るく思いますか。 (1)非常に明るい (2)かなり明るい (3)どちらとも言えない (4)かなり暗い (5)非常に暗い
2. あなたは将来を楽観的に考えますか、悲観的に考えますか。 (1)非常に楽観的 (2)かなり楽観的 (3)どちらとも言えない (4)かなり悲観的 (5)非常に悲観的
3. あなたの将来は、一般的に充実していると思いますか。 (1)非常に充実している (2)まあ充実している (3)どちらとも言えない (4)あまり充実していない (5)全く充実していない
4. あなたは将来の目標を明確にもっていますか。 (1)非常に明確な目標をもっている (2)まあ明確な目標をもっている (3)なんともいえない (4)あまり明確な目標をもっていない (5)全く明確な目標をもっていない

5. あなたは将来に対して不安がありますか。
 (1)たいへんある (2)かなりある (3)どちらとも言えない (4)あまりない (5)全くない
6. あなたは現在時間が無駄にすぎていく感じがありますか。
 (1)たいへんある (2)かなりある (3)どちらとも言えない (4)あまりない (5)全くない
7. あなたは将来、自分の性格が良い方向に変わると
 思いますか。
 (1)非常に良く変わると思う (2)まあ良く変わると思う
 (3)どちらとも言えない (4)あまり良く変わらないと思
 う (5)全く良くは変わらないと思う

(3) 調査Ⅲ—実存的責任意識—

積極的に自分の人生をきり開き、その責任は自分自身にあるとするか、あるいは自分の人生を消極的にとらえ、自分以外のもの手にゆだねるかを調べる調査である。

池田（1979）の実存的責任意識調査をそのまま使用した。これは人生への姿勢を測定しようとするものである。

10項目の具体的内容は表3に示すとおりである。各項目とも、課題状況を示す問題文とそれに対する責任のとおり方として、(A)、(B)2つの選択肢が与えられている。

2つの選択肢は、人生を積極的にひきうけ、よりよく生きることをめざすもの（Internal 回答と呼ぶ）と、人生を消極的・受動的にとらえて自分以外のものにより所を求めるもの（External 回答と呼ぶ）から成る。(A)、(B)の前に○印のついているほうが Internal 回答である。

回答の選択肢は、完全にどちらか一方の生き方であるというよりも、どちらの要素が強いかという程度の差によって選ばれると思われたので、「びったりでなくても、近いと思うものに○をつけてください」との教示を加えた。

(4) 調査Ⅳ—時間に対する志向性調査—

本調査は池田（1979）が作成したものである。これは Time Reference Inventory をもとにした上田（1972）の調査に手を加えて作成したものである。positive 尺度、negative 尺度、重要視尺度から構成されており、各尺度は5項目から成る。問題で示す状況がいつであるかを現在・過去・未来の中から選択させている。項目の配置の際には、positive、negative、重要視の3尺度の内、同一尺度に属する項目がとなり合わないよう考慮した。

(5) 調査Ⅴ—時間的展望の長さ—

どのくらい先の将来まで考えるか、時間的展望の長さについて調べる調査である。

- ①1カ月以内のこと、②1カ月から3カ月以内のこと、
 ③3ヶ月から6ヶ月以内のこと、④6ヶ月から1年以内のこと、
 ⑤1年から3年以内のこと、⑥3年から5年以

表3 実存的責任意識調査項目

1. 人間の生活には苦しいことがあるものですが
 ○(A)どうしてもさげられない苦しみには耐えるのは望ましい生き方である。
 (B)苦しいことに耐えても、何も良いことはない。
2. 良い人格を作り上げるためには
 (A)良い環境にめぐまれることが一番大切である。
 ○(B)自分の努力が環境よりも大切である。
3. 未来は
 (A)外からいやおうなしに自分に向かってくるように思う。
 ○(B)それにむかって自分が進むもので、自分がその自由な形成者である。
4. 過去の自分の失敗に対して
 ○(A)自分がしたことは自分の責任であり、失敗は失敗として受け入れる。
 (B)自分以外の環境等による面も多く、自分だけの責任ではない。
5. 大切な選択場面に直面した時
 (A)自分の能力で十分安全圏内にあると思われる容易な方を選ぶ。
 ○(B)失敗する可能性が大きくても、やりたければ困難な方を選ぶ。
6. 非行をするのは
 (A)周囲の事情、生まれつきの素質のためだから、自分の力では防げない。
 ○(B)ある程度まで、心のもち方であり、自分自身の責任は消えない。
7. 生まれつきの能力がふつうよりずっと低い人は
 (A)自分の能力を伸ばそうと努力しても無駄だと思う。
 ○(B)そういう人でも、自分の力を勢一杯伸ばそうと努力すべきだ。
8. 仕事をまかせられるとしたら
 ○(A)失敗した時の責任は大きくても、やりがいのある仕事を選びたい。
 (B)特にやりがいはなくても、大して失敗のない無難な仕事が良い。
9. 自分の望みが実現するかどうかは
 ○(A)何よりも、自分自身のやる気、努力にかかっている。
 (B)その時の状況、運によって大きく左右される。
10. 自分の人生は
 ○(A)せつかくの人生だから、どうかして自分自身で幸福にしてゆきたい。
 (B)与えられたもので、運命にはさからえない。

表4 時間に対する志向性調査項目

- (1) Positive尺度
- ①自分の人生において最も幸福なのは、_____だろう。
 - ④_____のことを考えていると楽しい。
 - ⑦私の一生で、一番愛情に満たされているのは_____だろう。
 - ⑩私の人生で精神的に安定しているのは_____だろう。
 - ⑬私の人生で最も充実感があるのは_____である。
- (2) Negative尺度
- ③一番大きな悩みをかかえているのは多分_____だろう。
 - ⑤_____私の人生の内、最も不幸なのは_____である。
 - ⑧_____を思うと、暗い気持ちになる。
 - ⑪私の一生で最も孤独で寂しい時は、_____である。
 - ⑭私が最も無力感にさいなまれるのは_____である。
- (3) 重要視尺度
- ②私の空想の多くは、_____である。
 - ⑥私の一生は_____によって決定されると思う。
 - ⑨私にとって価値のあるのは_____である。
 - ⑫私は_____に生きている。
 - ⑮私を一番規定しているのは_____である。

注—には、過去、現在、未来がはいる。

内のこと、①5年から10年以内のこと、④10年から15年以内のこと、⑩15年から20年以内のこと、⑭20年以上後のこと、の以上①から⑭までの各項目に対して、いつも考えている、ときどき考える、あまり考えない、めったに考えないの4段階に評定させている。いつも考えているを4点とし、4点から1点に得点化した。

被験者

被験者の年齢構成は表5に示したとおりである。男性124名、女性133名、計257名である。都内私立女子短大1年生に1人2部の調査表を配布し、男女各1名の調査表を依頼した。被験者の大多数は、短大1年生の両親であ

る。そのため、30代後半から50代前半の被験者数が多くなっている。50代後半以降の被験者数が少ないため50代後半の男性を除き結果ではこの年齢段階を省略した。

結果

結果については、年代の前半と後半による差、性差が大きいことがわかったので、年齢段階は、20—25、25—29、30—34と5歳毎に区切り、また、性別を分けて整理した。

(1) 生活感情調査結果

図1は30項目の合計点の平均を年齢段階別にあらわしたものである。得点が高いほうが positive な生活感情をもっていることを示している。この図で特徴的なのは、男性の30代後半に生活感情が negative になっている点である。男性の30代後半と40代前半との間に差のある傾向があり、(t=2.137, p<.10), 40代後半(t=2.746, p<.02), 50代前半(t=2.791, p<.01)との間にそれぞれ有意差がみられた。

男性と女性とを比較してみると、男性では40代を除くと生活感情が、各年代とも後半になると前半よりも positive から negative に変化している。それに対して、女性では年代の後半になると生活感情が negative になるという傾向は示していない。女性では年代による差が

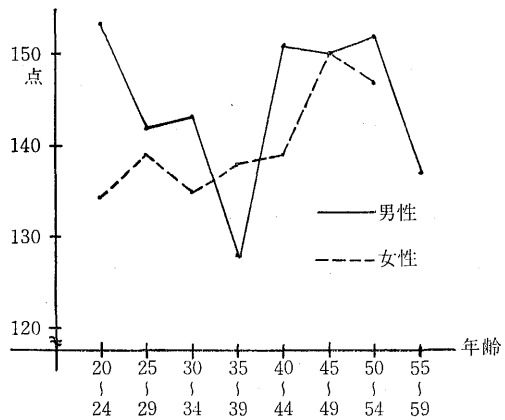


図1 生活感情・全体

表5 被験者の年齢構成

年齢	20—24	25—29	30—34	35—39	40—44	45—49	50—54	55—59	60—64	65—69	70—74
女	7人	5	4	7	27	54	23	1	0	4	1
男	6	6	4	6	10	39	42	5	2	3	1
全体	13	11	8	13	37	93	65	6	2	7	2

男性ほど明確ではなく、どの年齢段階間にも有意差はみられなかった。図からみると、40代前半まではあまり大きな変化はなく40代後半以降になると positive 方向に変化する傾向があり、20代前半と40代後半との間に有意差がみられた。（ $t = 2.000$, $p < .05$ ）。

次に、連帯—孤独、安定—不安定、充実—空虚の次元別の結果を図2、図3、図4に示す。

連帯—孤独次元をみると、女性では年齢段階による差はみられない。男性では、30代後半に孤独感が強まっており、40代前半との間に有意差がみられた（ $t = 2.641$, $p < .02$ ）。

安定—不安定次元では男女とも年齢段階による差はみられなかった。

充実—空虚次元については、女性では年齢段階による差はみられなかった。男性では、30代後半に有意に空虚

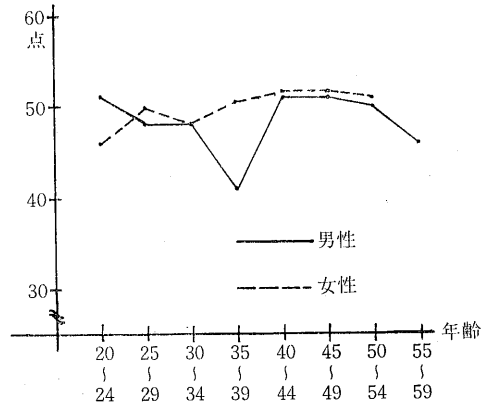


図4 生活感情・充実—空虚次元

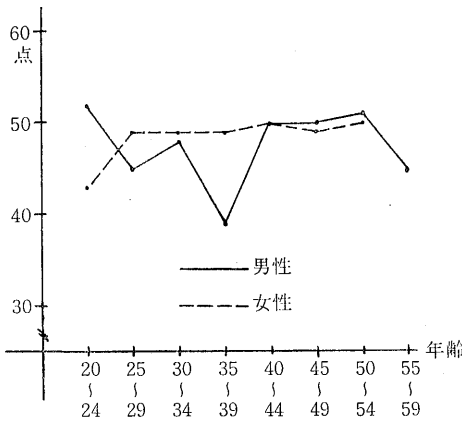


図2 生活感情・連帯—孤独次元

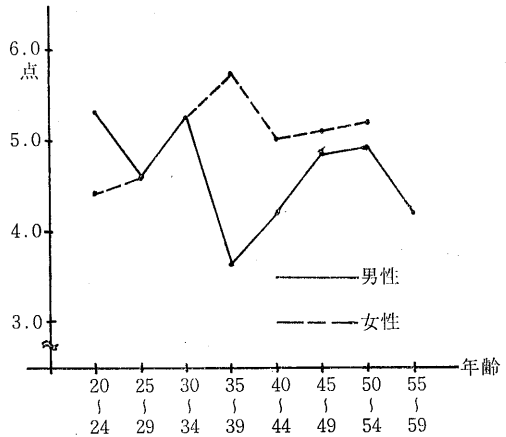


図5 連帯—孤独次元・にぎやかな—さみしい

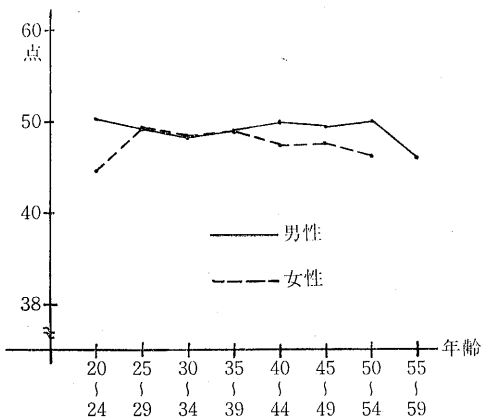


図3 生活感情・安定—不安定次元

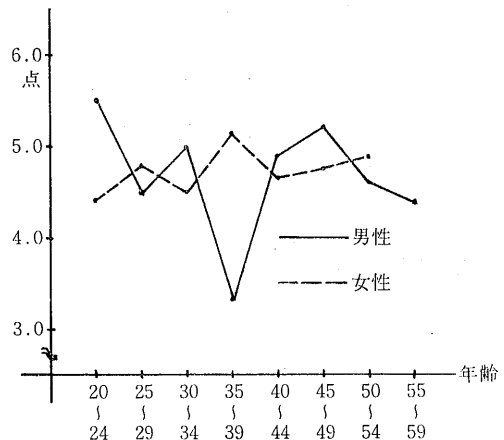


図6 連帯—孤独次元・まとまった—バラバラな

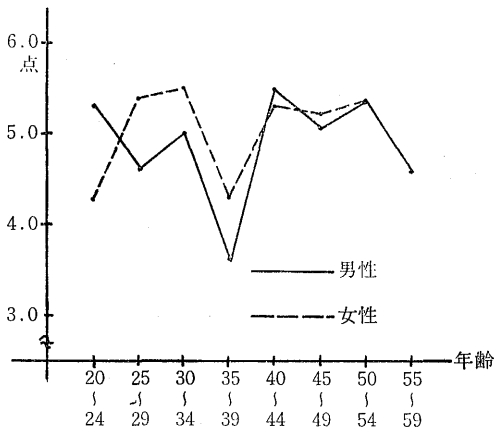


図7 連帯-孤独次元・うちとけた一心のへだてのある

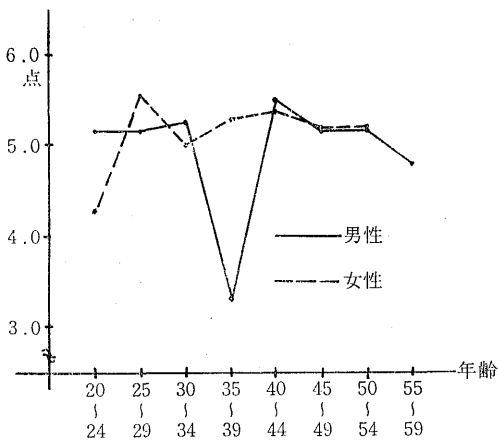


図8 連帯-孤独次元・仲間の多い一人ぼっちな
 感が高まっており、40代前半との間に有意差がみられた ($t = 3.351, p < .01$).

次に、連帯-孤独次元の下位項目をみていく。年齢段階によって差のみられた項目を図5から図9に示した。これらの図をみると男性で特徴的な点は、30代後半にnegativeな傾向が強く、さみしく、バラバラで、心にへだてがあり、一人ぼっちであり、依存的であると評価される傾向がみられる点であった。また女性では20代後半にnegativeな傾向があり、さみしく、心のへだてがあり、一人っちぼで依存的であると評価されている。

次に、安定-不安定次元の下位項目で差のみられたものを図10から図12に示す。この図からみると、これまで

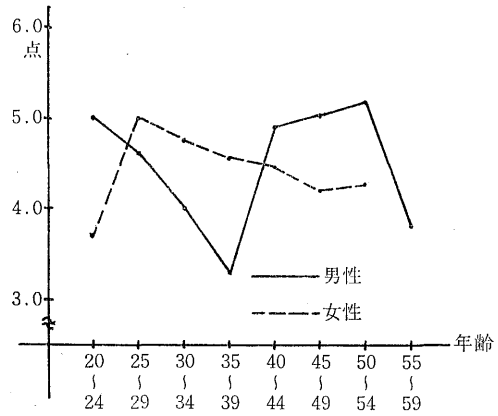


図9 連帯-孤独次元・指導力のある-依存的な

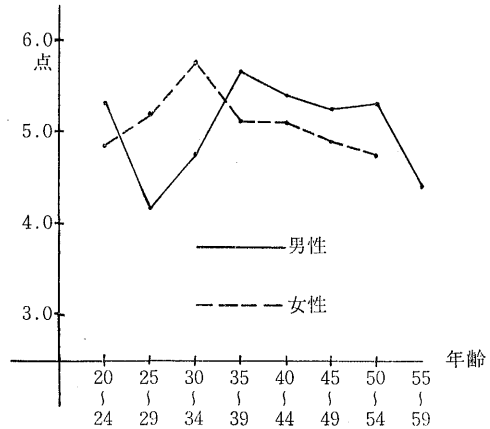


図10 安定-不安定次元・力あふれた-無気力の

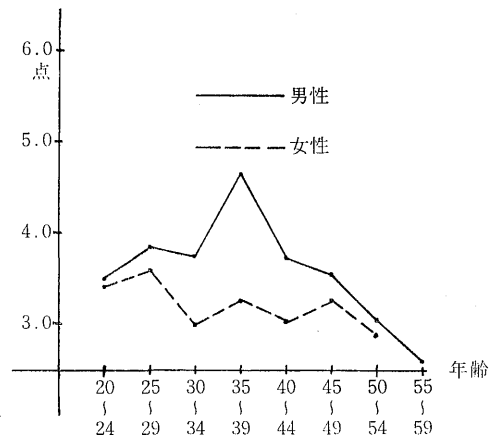


図11 安定-不安定次元・信じやすい-疑い深い

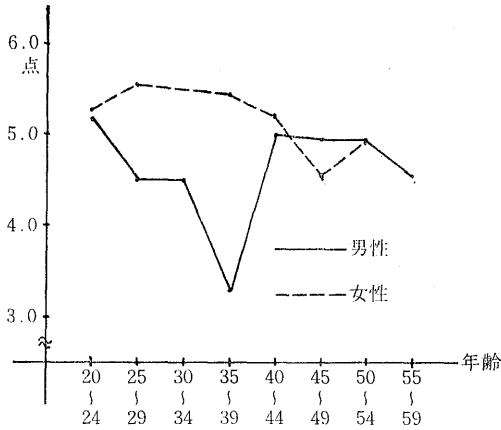


図12 安定-不安定次元・楽観的-非観的な

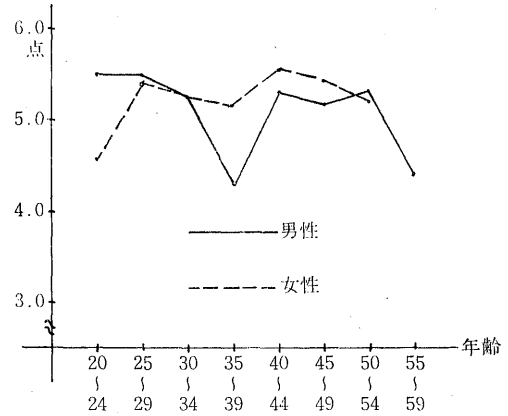


図15 充実-空虚次元・望みのある-望みのない

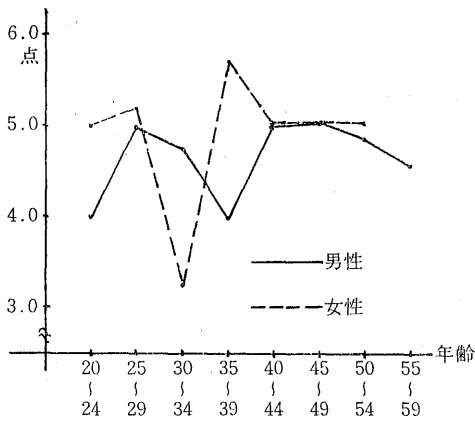


図13 充実-空虚次元・楽しい-苦しい

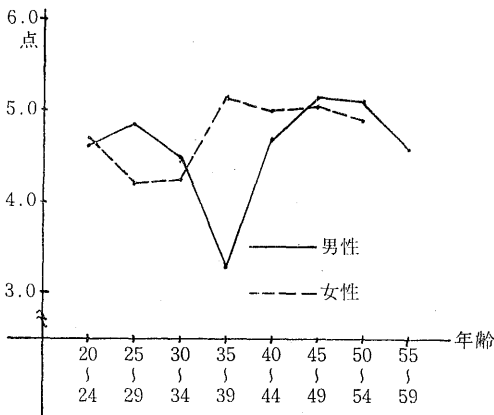


図14 充実-空虚次元・充実した-虚しい

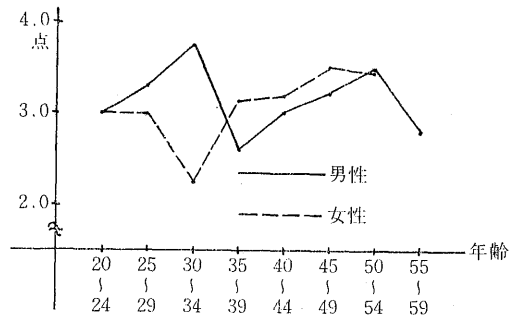


図16 将来の展望の明暗・将来に対して不安はあるか

の傾向と異なり、30代後半の男性に力あふれる、信じやすいという面で positive な評価がみられた。有意ではないが、おちついて、おだやかで、健康的で、静かであるとも評価されていた。しかし、図12にみるように、楽観的か悲観的かという面では非観的と評価される傾向が高かった。

充実-空虚次元で差のみられた項目を、図13から図15に示す。図13をみると、女性の30代前半に苦しいという評価が強くなっている。図14と図15から男性の30代後半に虚しく、望みがないという negative な評価がみられた。

(2) 将来の展望の明暗

各項目毎に得点の平均をみた結果、図16に示した将来に対して不安があるかについて差がみられたのみで他の項目については、年齢段階による差、性による差はほとんどみられなかった。

将来に対して不安があるかについては、男性では、30代後半に将来に対して不安が高く30代前半との間 ($t = 2.724, p < .05$) に有意差がみられた。女性では、40代

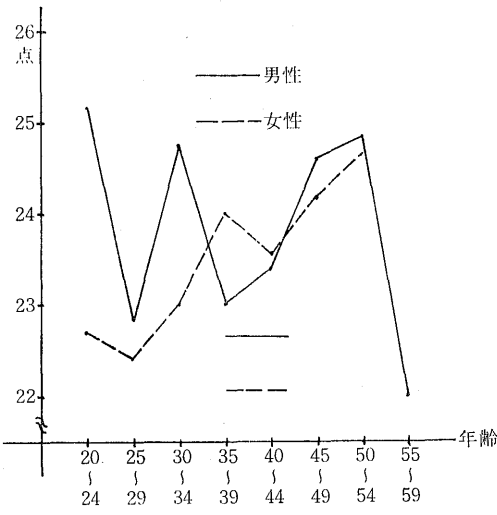


図17 将来の展望の明暗・全体

前半に将来に対する不安が高く、40代後半との間に有意差がみられた ($t = 2.613, p < .05$).

全項目の得点を合計したものの平均を図17に示した。どの年齢段階間にも有意な差はみられなかった。しかし図からみると、男性では、20代と30代と50代において前半よりも後半のほうが将来を暗いと評価していることがわかる。それに対して、女性では、年齢が高くなるほど将来を明るいと評価する傾向がみられた。

(3) 実存的責任意識に関する結果

10項目のうち Internal 回答の数を得点として、その平均を図18に示す。男性は、20代後半に Internal 得点が低下し、20代前半との間 ($t = 2.768, p < .02$) と

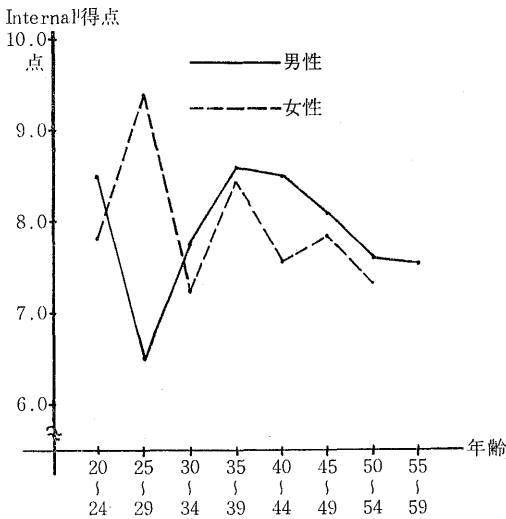


図18 実存的責任意識—Internal 得点

30代後半 ($t = 3.241, p < .02$), 40代前半 ($t < 2.761, p < .02$), 40代後半 ($t = 2.268, p < .05$) との間にそれぞれ有意差がみられた。他の年齢段階間には差がみられなかった。

女性では、20代後半に逆に Internal 得点が上昇しているが他の年齢段階との間に有意な差はみられなかった。

性差をみると、20代後半の男女間に有意差がみられた ($t = 3.663, p < .01$).

(4) 時間に対する志向性に関する結果

表4に示した positive, negative, 重要視の3尺度について性別に結果を図示した。

どの項目についても過去と未来に対する志向性のみを図にあらわしてある。

最初に positive 尺度についてみていく。人生において最も幸福で、そのことを考えていると楽しく、一番愛情に満されており、精神的に安定しており、もっとも充実感を感じているのは、過去であろうか、未来であろうか。

図19, 図20は、positive 尺度についての結果である。positive 尺度の全回答数に対して過去、未来を選択した比率を示した。なお、志向性に関する結果のみ60代前半の結果まで図示してある。

男性の結果をみると過去を positive に評価している率は、50代後半以降急激に上昇している。これは女性についても同様で、女性では60代前半で急激に上昇している。50代後半になると過去に目が急激に向きはじめ、過去はよかったという見方が強まると考えられる。

未来に対する positive な評価は男性では30代後半がもっとも高くそれ以降は徐々に低下している。女性では20代に未来に対して positive な評価が高い。

次に、negative 尺度についてみていく。大きな悩みをかかえ、最も不幸で、それを思うと暗い気持ちになり、孤独で、寂しく、無力感にさいなまれるのが、過去か未来かをみる尺度である。図21が男性、図22が女性の結果である。

男性についてみると、30代の前半をのぞくと、年齢が高くなるにつれて過去を positive に評価する率が上昇し、逆に未来を positive に評価する率が下降していつている。こうした一般的傾向に反しているのが30代である。30代前半では、未来を negative に評価している率が低く、逆に30代後半では未来を positive に評価している率が高い。

女性については、年齢段階による大きな差はないが、50代後半に過去を negative に評価している率が高まっている。

最後に、重要視尺度についてみる。それについての空想が多く、自分の一生を決定し、自分にとって価値があ

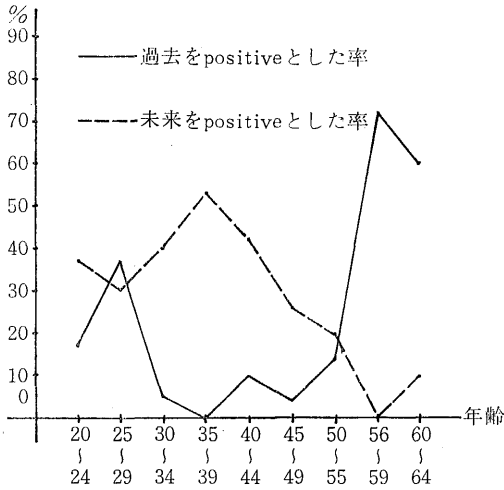


図19 時間に対する志向性—positive 尺度—男性

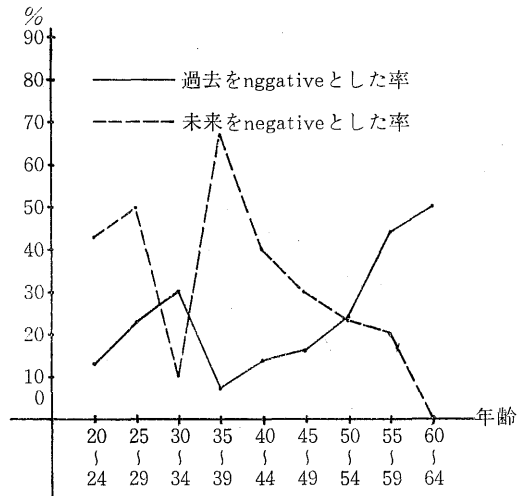


図21 時間に対する志向性—negative 尺度—男性

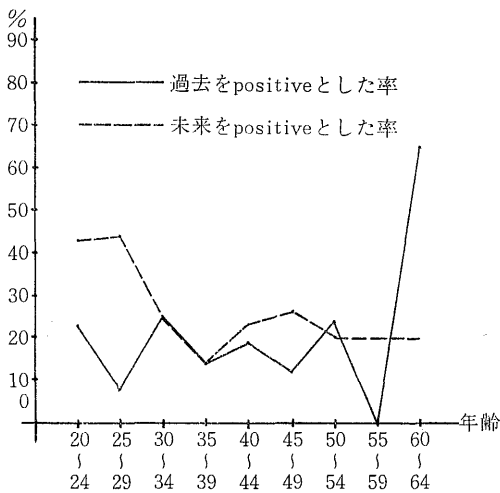


図20 時間に対する志向性—positive 尺度—女性

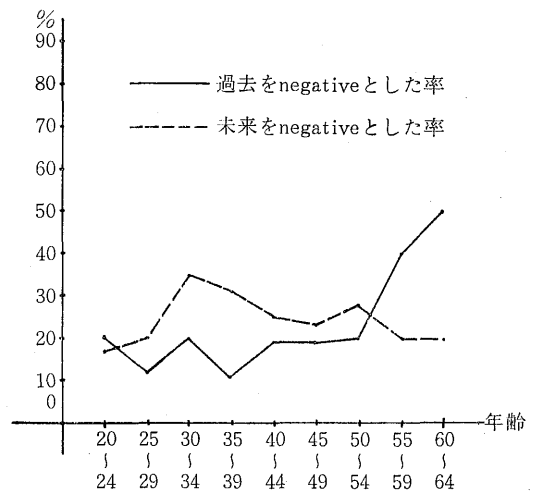


図22 時間に対する志向性—negative 尺度—女性

り、そこに生き、自分を一番規定しているのは、過去であろうか、未来であろうかをみる。

男性では、年齢とともに過去を重視し、未来が重視されなくなっている。ただし、30代前半で未来を重視する率が低い。

女性では、20代で未来よりも過去を重視する度が高く、30代で未来も過去も同様に重視し、40代以降は再び過去を重視するようになりその傾向は50代後半に急激に強まることを示した。

(5) 時間的展望の長さに関する結果

④から⑧の各項目毎に、考えている程度について得点化して平均値をみていった。その結果、時間的展望の長

さは3段階に変化すると考えられた。1年までと、1年から10年後までと、10年以降である。それぞれの段階で代表的な項目を図25、26、27で示してみた。

図25は、3ヶ月から6ヶ月以内のこと、図26は、3年から5年以内のこと、図27は15年から20年以内のことについて考えている程度をあらわしたものである。

それをみると、1年までは、どの項目でも年齢段階による差はみられず、どの年齢でもときどきは考えると評価されている。

1年から10年までについてみると、3年から5年以内については、男性では30代後半になると考える程度が高くなり、30代前半との間に有意差がみられた($t = 2.686$,

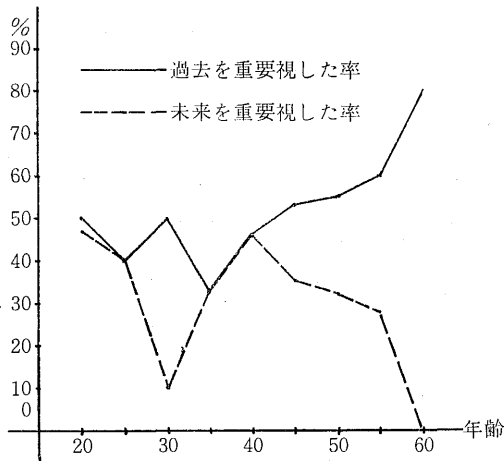


図23 時間に対する志向性—重要視尺度—男性

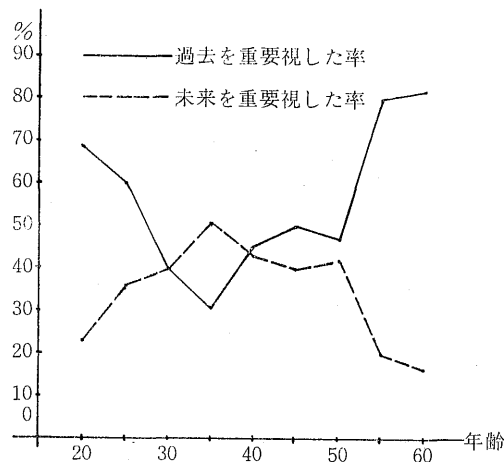


図24 時間に対する志向性—重要視尺度—女性

$p < .05$). 女性では、30代前半に考える程度が低く、40代前半との間 ($t = 2.673, p < .05$) と、40代後半との間 ($t = 2.832, p < .001$) に有意差がみられている。他の項目をみても男女とも30代後半になると1年から10年以内のことについて考える度合が高くなり、その傾向はそれ以降もつづくといえる。

10年以上後のことについてみる。15年から20年以内については男性では35代後半にもっともよく考えており、20代前半以外の他のどの年齢段階との間にも有意差がみられた。女性では年齢による大きな差はない。この傾向は他の項目でも同様に認められた。

考 察

年代の前半と後半での心理的な差、および成人期を通

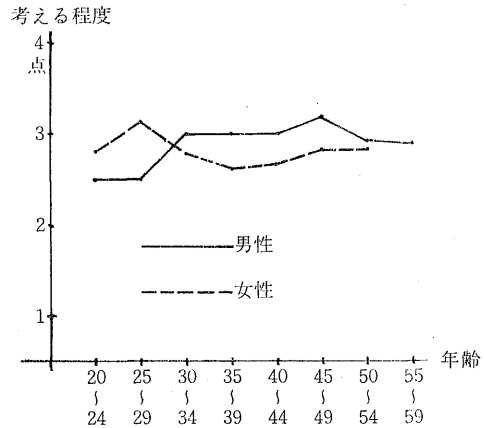


図25 時間的展望の長さ・3ヶ月から6ヶ月以内のこと

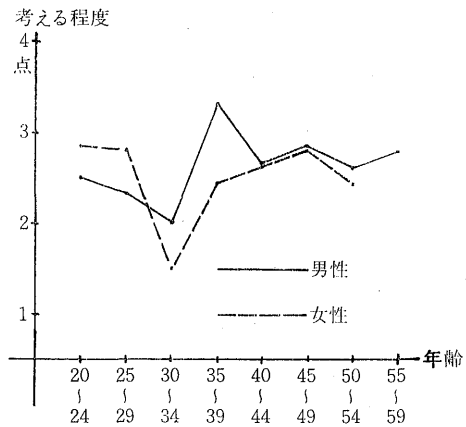


図26 時間的展望の長さ・3年から5年以内のこと

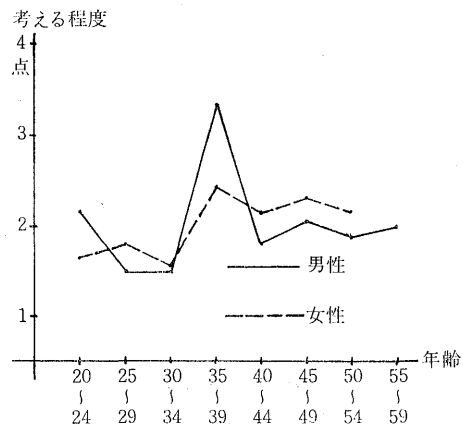


図27 時間的展望の長さ・15年から20年以内のこと

しての傾向について、性別に結果を考察する。

年代の前半と後半での心理的な差については、生活感情と将来の展望の明暗において示唆が得られた。ともに全体としてみた場合、男性のみに於いて、後半は前半よりも生活感情が negative になり、また、展望も暗くなっている。年代の後半になると、次の年代を前にしてあせりの色をこくしていくことがうかがわれる。しかし、40代では前半と後半との間にこうした差はみられなかった。

40代で前半と後半に差のみられない原因はなにか。20代のなかばは、青年期から脱する時期、30代のなかばは中年期へ移行する時期、60代なかばは老年期に移行する時期にそれぞれ該当する。それに対して40代なかばは中年の盛りであってまだ老年期に入るには間がある時期である。このことが、40代にある安定をもたらし、そのために前半と後半に差がみられないのかもしれない。それに対して、前半と後半の差が著しいのが男性の30代である。

男性は30代の後半になると、生活感情が negative になる。特に孤独感、空虚感が強くなる。しかし不安定感が強いとはいえず、安定—不安定次元の下位項目では、30代後半のほうが positive な項目がみられた。力あふれて、信じやすく、おだやかで、落ちつきがあり、静かであるという評価である。中年の落ちつきをもちはじめ、その反面心の中では空虚さ、孤独感をもっているというのが30代後半である。

また30代後半は、将来の展望の明暗をみても将来に対する不安が高い時期である。時間に対する志向性をみても、positive 尺度、negative 尺度において未来を選択している率が極端に高くなっている。さらに時間的展望の長さに関しても1年以内については差はないが1年以上については考える度合が他の年齢よりも高い。

こうした結果は、30代後半が将来に対する関心が強くなる時期であることを示している。この将来の目の向け方も単に未来を夢想しているのではなく、期待とともに大きな不安を感じながら将来に目を向けている時期である。

落合（1980）では、女性の40歳直前は非常に不安定で問題の大きい時期であるとされていた。しかし、この調査では男性の30代後半が非常に大きな問題をもっている時期であることが明らかにされた。

女性の30代後半については、男性と比較すると他の年齢と比して特徴とみられる点は少ない。生活感情尺度の連帯—孤独次元でやや心のへだてがあると評価される度合が高いこと、時間に対する志向性調査の重要視尺度において、未来を重要視する度合のもっとも高い時期であることが示されたにすぎない。だが未来に関心が向く時期であることは男性と同様である。

全体としてみると、女性では前半と後半による差はみられない。

女性のほうが年齢には敏感に反応するのではないかと予想していたが、結果は異なった。生活感情、将来の展望の明暗ともに、年齢が上昇するにつれて、それぞれ positive な方向に、明るい方向になっている。では女性において前半と後半の差が明確でない理由はなにか。

これまで女性を対象にした調査では、個別に接するとでてくる悩みや苦しみは調査となるとうきぼりにされないとわれてきた。その理由については、結婚と育児が社会的に女性の天職と認められており、それさえしている限り女性の立場をおびやかすことはない。女性自身も仕事をもつといった他の役割が欠如していることに対する悩みをもつことはあっても、子育てをしたという事実がすべてを帳消しにし、合理化させるほど強力であるのではないかと考えられる。女性は未婚の20代前半でやや不安定であるのにそれ以降比較的安定した傾向を示しているのはこういった理由によるのかもしれない。

次に成人期の全体的傾向についてみていく。時間に対する志向性に関する結果をみると、positive、negative、重要視の3尺度とも、年齢が高くなるほど過去を選択するようになり未来を選択する率が低下することが示された。またこうした傾向は50代後半になると急激に強くなっている。50代後半になると、急に老い先の短かさを痛感しはじめ過去に目を向けるようになるのかもしれない。この点については、生活感情、将来の展望の明暗の調査でも、50代後半になると、生活感情が急激に negative になり、将来の展望も暗くなっており、50代後半の心理的変化を裏づけている。こうした結果は、年齢が人間の心理に大きな影響をもつ変数であることを示唆している。

要 約

人間の年齢と生き方、精神との関係を①生活感情、②将来の展望の明暗、③実存的責任意識、④時間に対する志向性、⑤時間的展望の長さの5つの面から明らかにしようとした。対象は20代前半から70代前半までの男性124名、女性133名、計257名である。結果は次の通りである。

1. 男性は、各年代の前半と後半では心理的な変化があり、後半のほうが生活感情が negative になり、将来の展望も暗くなる。
2. 女性は、年代の前半と後半では差がない。
3. 年齢が高くなるにつれて過去に対する志向性が高くなり、この傾向は50代後半において著しい。
4. 男性の30代後半はもっとも特徴的な時期である。力強く、落ちついている反面、孤独感、空虚感が強く、また将来への関心が強まる時期である。

5. 性差がどの面でも著しい。

参考文献

1. ボルノー, O, 森田孝訳 1975 時へのかかわり—時間の人間学的考察— 川島書店
2. 池田百合子 1979 青年期における時間的展望の特質 筑波大学昭和53年度卒業論文
3. 小宮山要 1973 青年の時間的展望に関する研究, 日本心理学会 第37回大会論文集

4. 落合幸子 1980 人生の転換期における心理 筑波大学心理学研究, 2, 111-124.
5. 齊藤耕二 1966 生活感情尺度作成の試み 東京学芸大学紀要, 18, 75-87.
6. Wohlford, p., 1966 Extension of personal time, affective states and expectation of personal death. *J. pers. soc. psychol.*, 3, 559-566.

—1980. 9. 30. 受稿—

SUMMARY

A Psychological Study on Turning Points of Life (II)

Yukiko Ochiai

The University of Tsukuba

This study aimed to examine the influence of age toward consciousness such as self-concept, future time perspective, existential locus of control, time orientation and extension of time perspective. Subjects were 124 male and 133 female ranging from the first half of 20s to the first half of 70s.

The results are as follows.

1) The self-concept and the future time perspective of male in the latter half of each decade are more negative than the male subjects in the first half.

2) Female subjects showed no significant

psychological difference between the first half and the latter half of each decade.

3) Orientation to the past becomes higher than orientation to the future in accordance with age, and this tendency is the most notable in the latter half of 50s.

4) The latter half of 30s of male is the most notable period in life. This period is characterized by mental powerfulness and calmness, on the contrary, feeling of loneliness and vanity become stronger in this period. One is gradually concerned about his future in this period, too.

5) Significant sexual difference was seen.